

レポート(4月14日授業)

氏名:石田 和子(いしだ かずこ)。職業:看護師。「公衆衛生看護学・実践コース」・学籍番号(22S1010)

と申します。

事前の資料と実際の講義映像を拝見し、自分の持っている価値観が180℃変わったように思います。自分は、無意識に支援する側として、物事を捉えていたのだと分かりました。

「えびちゃん」のお話は、これまでの自身の既成概念を覆すものでした。「通常学級」の「通常」とは何なのか。「特別学級」の「特別」とは何なのか、と考えざるをえませんでした。それは、はっきりと線を引く、ということになるのではないのでしょうか。そして、通常の側にいる人は、特別の側にいる人を助けるものだ、という考えに陥ってはいるのではないかと。少なくとも自分の中には、そのような感覚がありました。そのことを、「えびちゃん」は、教えてくれました。自分も困ったら、誰かに助けてもらいますし、誰かが困っていたら、助けたいと思う。それは、世間が想像するような「ボランティア」という意識からではなく、「お互いさま」という感覚に近いものなのではないかと考えました。お話を聴けたことは貴重な経験となり、自身の価値観を大きく揺さぶられるものでした。ありがとうございました。

「丹ちゃん」の生活は、驚きの連続でした。会社に勤務しながら、認知症であることを隠さず、周囲の人もサポートをしながら、日常生活が送れていることに驚きました。自分の感覚では、「認知症」と診断されること自体が、それまでの生活と切り離されてしまうようなイメージがあったからだと思います。そして、「丹ちゃん」からの「お薬メール」は、本当にほっこりしました。ともすると、指示的になってしまいがちな内容ですが、あのような文面で届くと、「あっ。そうだ。飲まなくちゃ」と自然に思えるのだと知りました。

以前テレビで拝見したのですが、八王子市にある認知症のデイサービスでは、利用者自身が「何をしたいのか」ということを中心に活動されている事業所がありました。それは、「有償ボランティア」という形で、車の洗浄、公園の整備などといった労働に対して、賃金が生じるというものでした。それは、認知症の方の社会参加と共に、認知症に対する地域の人々の意識改革にも繋がっていった、という内容でした。どのような状況になっても、「やりたいこと」を実現できる社会、社会と離れないように、今いる地域で繋がりを持つことの重要性を知りました。

そして、小山さんのお話です。「小規模」という事業所が、このように創設されたものであることを、はじめて知りました。制度が作られるのは、現場から発生する必然性によるものであることを知りました。それを形にするまでの経過を知ることができたのは、大きな学びとなりました。私は、「存在する資源の中で何とかしよう」との思いで、これまで仕事をしてきたことにも気づくことができました。そうではなくて、どうしても必要なものがあれば、それを形にしていくように行動にうつすことの大切さを知りました。

そして、「エーバルト・クローさん」については、どの国に生まれるかで、生活は 180℃違ってしまふことを教えてくれました。「その人らしく生きる権利」が保証されるとは、こういうことなのだ、と知ることができました。「障害」を個人や家族としての枠で捉えるのではなく、社会全体で支えるということについての認識を新たにすることができました。

今回の授業を通して、支援する側と支援される側には、はっきりと境界線を引いていた自分に気づきました。「本当のボランティアは自分の事をボランティアとは思っていない」ということ、本当のボランティアは「火山のように噴き出してくる気持ち」からくるものであることを知り、大きな学びとなりました。

今後の授業を通して、自分の中にある概念にとらわれず、新たな学びを得たいと考えております。